

トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻病（病原：Tomato yellow leaf curl virus）は、タバココナジラミが媒介するトマトのウイルス病です。国内では平成8年に初めて確認されて以降、発生地域が徐々に拡大し、現在は、東北地方南部以西の温暖地域を中心に、38都府県で発生が確認されています。本県では、平成25年9月に確認されて以降発生はみられませんでした。令和3年9月に発生が確認されました。

本病は、トマト及びビトルコギキョウでまん延すると甚大な被害となるので、早期発見・早期対応によりまん延を防止しましょう。

被害の様子

- (1) 発病初期は新葉が葉縁から退緑(図1)しながら葉巻症状を呈し、症状が進行すると生長点付近の小葉が萎縮(図2)、葉縁部が黄化して縮葉する。さらに病勢が進行すると、頂部が叢生し、株全体が萎縮する(図3)。
- (2) 発病後の果実は正常に発育しない。
- (3) 感染したトマト株は外見上異常が見られなくてもウイルスを保持している。感染から発病までの時間は温度や株の大きさによって異なり、25℃の条件では発病までに3週間程度かかるが、低温期には症状がはっきりせず、発病までの期間が長くなる。



(図1) 発病初期の退緑症状



(図2) 生長点付近の萎縮症状



(図3) 株全体の萎縮症状

伝染経路と発生生態

- (1) 本ウイルスは、タバココナジラミが媒介する。オンシツコナジラミは媒介しない。また、種子伝染、土壌伝染、管理作業等による接触伝染はしない。
- (2) タバココナジラミは幼虫、成虫ともに感染した植物を吸汁すると約24時間後にはウイルス伝播能力を獲

得する。経卵感染(保毒成虫から次世代にウイルスが伝染すること)はしないが、保毒虫は死亡するまで伝播能力を有する。

- (3) 国内で本病の発生が確認されているのは、トマト、ミニトマト、トルコギキョウなどの他、キク科(ノゲシ、ヒャクニチソウ)、ナス科(タバコ、チョウセンアサガオ、パチュニア、ピーマン、ジャガイモ)、マメ科(インゲンマメ、ヒラマメ)など8科18種以上の植物で感染が確認されているが、感染しても無病徴の場合もある。

診断のポイント

- (1) まん延防止を目的に、令和4年3月に「長野県トマト黄化葉巻病防除対策指針(改訂版)」が定められ、
①タバココナジラミの早期発見・早期対応 ②速やかなトマト黄化葉巻病処置 など関係機関が一体となって総合的な防除対策を講じることとなっている。本病が疑われる場合には、速やかにJ A等指導機関又は最寄りの農業農村支援センターに連絡を取り、診断を依頼する。

防除の方法

- (1) トマト黄化葉巻病を防除するためには、媒介昆虫であるタバココナジラミを防除する必要がある。
(2) 苗の導入に際しては、ウイルス感染やタバココナジラミの寄生がない健全株であることを確認する。
(3) 施設栽培の場合は、開口部に0.4mm以下の目合いの防虫ネットを張り、開放状態にしない。また光反射マルチ資材や近紫外線除去フィルム等を設置し、成虫の侵入を防ぐ。
(4) 施設、ほ場の内外に黄色粘着シートや黄色粘着板を設置し、成虫の早期発見と捕殺を行う。
(5) タバココナジラミの防除農薬についてはJ A等指導機関又は農業農村支援センター等に相談して使用する。また、薬剤抵抗性の発達を防止するために同一系統の薬剤の連用を避ける。
(6) 施設やほ場周辺の雑草や野生えトマトは、タバココナジラミの増殖原となるので適切に処分する。
(7) トマト黄化葉巻病に罹病した株は、抜根し隔離して完全に枯死させる。施設栽培の場合には、密閉して蒸し込み処理を行い(40℃、10日以上)、タバココナジラミを死滅させる。残渣は施設外に持ち出し焼却する。

疑わしい症状を見つけたら、最寄りの農業農村支援センター又は病害虫防除所までご連絡ください。

長野県病害虫防除所 (東北信)TEL026-248-6471 (中南信)TEL0263-53-5642

発行 長野県病害虫防除所 令和4年9月作成